

「水野勝俊公奉葬の記」翻刻

棚 橋 浩 子

解 説

近世初期の俳人、野々口立圃が「空磔」（慶安二年刊）の中で、たと程々に応ぜるを主君とあがまへて、けふは御供よ、あすは御目見えよと出たつこそほるにおほゆめれ

と言ひ、実際その言葉通りに、備後福山藩水野家のお抱え俳諧師となつたのは周知のことであるが、その水野家との交渉はいつたいいつ頃からはじまつたのか、或は具体的に何年頃まで勤仕していたのかという点になると明白でない事が多い。

土肥日露之進著「福山藩誕生帯福山と立圃」によれば、立圃は福山藩二代目藩主・水野勝俊に招かれ、慶安四年四月上旬はじめ福山に米遊し、勝俊に見えたとある。たしかに立圃を招いたのは、これから翻刻する「水野勝俊公奉葬の記」の文

我、年久しく俳諧にかしらをかたふけ、眉をしかむれと、いかにととふ人もなく唯身ひとつのことくさとなし、心ならず勝俊公聞し召つてめし出され……

によつても、勝俊であったことはおそらくまちがいないだろう。

しかし問題は、何年頃召し出されたかということである。慶安四年四月上旬に、立圃が福山へ初遊した事は彼の著「草戸記」の文よろこびやすき年の三つがひとつ、月は卯の花の咲かゝりたる頃、此所にまかりてはじめての会に……

から推量出来るが、それがすぐに勝俊公への初目見えにつながるかどうかは疑問である。実際、「空磔」を見てもわかるように立圃は早くから、いずれかの大名に、或はそれに相当するものに勤仕したがっていたのであり、更に慶安二年から三年にかけて、勝俊も立圃も江戸にいたとあつてみれば、この頃に召し出されたと想像することも可能ではないだろうか。しかし現在確かな文献もなく、慶安四年四月上旬をもって、勝俊へ勤仕したと見るのが通説のようである。

そもそも福山藩水野家は徳川譜代大名の一つであり、初代が水野勝成、二代が同、勝俊、三代が同、勝貞となっている。特に二代勝

俊は合徳院（徳川二代将軍秀忠）に仕へ、大阪冬・夏の陣に出陣し、数々の武功をたてた人で、寛政重修諸家譜によると、寛永十六年閏十一月十六日、初代勝成が隠居するに及んで封を襲い、十七年八月十一日はじめて領地に入り、藩主としての座についたと書かれている。

以上、勝俊の庇護をうけた立圃の活動にはめざましいものがある。先、歳末に帰京、翌慶安五年（承応元年）三月には摂州富田で大阪の一門と興行、四月には「隔篋記」を書いた鳳林承章と知己になり、夏には福山へ再び下向し、その足で勝俊と共に江戸へ東上している。そのまゝ約一ヶ年江戸で過ごし、翌、承応二年初冬、また勝俊に供して帰京、承応三年十月再び江戸へ出立するといった具合である。その間「俳諧万句」「桃の酒百韻」「俳諧千句」をはじめ、立圃の俳諧觀を示す代表作「河船徳万歳」等を著わしている。

翌、承応四年（明暦元年）二月廿一日、水野勝俊が江戸藩邸に於て没し、殉死者七名を出すという事件が起り、同時に立圃も俳諧のよき理解者を失なうに致った。

立圃はこの時六十一歳で、享年五十八歳で永眠した勝俊とわずか三つちがいであった。従つて立圃の老の身の寂しさもひとしおであったらうし、また、武士道の面目を立て、殉死した人々への感慨も特別なものがあつたであらう。こゝでつけ加えておきたいが、殉死

禁止の令が幕府から出たのは寛文三年（一六六三）で勝俊の死より八年後にあたる。

こうした中で、立圃が往年の勝俊の様から臨終の時、殉死者の事等を哀切に満ちた筆でまとめ、一巻となしたが、現在「水野勝俊公奉葬の記」とか「信解院殿御臨終の記」とかいわれて伝わっているものである。

この巻物は従来、芦品郡明泉寺（野々口立圃、木村三四吾氏、明治書院、俳句講座俳人評伝上）と草戸町明王院にそれぞれ一巻ずつ蔵されていたが、明泉寺のは一昨年御住職が逝去されたため、現在その所在がわからず、従つてこの二巻の比較が出来ないのが残念である。故に翻刻をするのは明王院蔵本の方であるが、何故、どういうケースでこの二寺に同内容と思われるものが伝存されているのか、また、特にその中で明王院と立圃との関係はどうであつたのか、調査不足のため、明白にすることが出来なかつたことをお詫びいたしたい。

なお、明王院本の書誌を記すと、題簽なし、表紙金襴、本紙白紙、縦三〇・三寸（一尺）、長さ四六六寸（十五尺四寸）内、見返し十五寸（五寸）である。

最後に、これを甲南園文化翻刻掲載することをお許しいたゞきました明王院御住職様と、掲載をおゆるしいたゞきました甲南女子大

学園文学会の先生方に厚く御礼申し上げます。

凡例

出来るだけ原本の面影をとゞめるため、句読点はうたず、行も原本通りにした。括弧内は立圃が誤って記した字で訂正されているが、参考のために書いておいた。

※ ※ ※

勝俊公ハ常に御身のいたつけるところなればにや御年五十八と聞えしかまた若くさかりの御かたちにて桜さし遠山鳥の實にもひとしかるへしと家人皆よろこひあへりけり
去年の栞より江戸におはししても名高き人々の交りにもれさせ給ふ事なく内外のはひ日々にいやまさりいさゝか御いとまもあらすもし
哲もすき間あれば若き者共に弓筆の道をいとませて心はせの深さ浅さをしるしめし
数々の馬をかけ合させて八足のとき運きを分ち折くハ水草の色く花実の数をあつめ瓶の上に遠き近き海山の風景を作りたて御心を慰ませ給へりしか師走の

中比ふしきの御煩ひに打ふし給へるも年ころ事なかりしに皆人思ひ馴てかろかるしく

見あつかひ奉けるに日にそひてをもくみえさせ

給へはあはてきはき良醫術を尽し貴僧

加持なと參れとさらにしるしなくて陸月も

たちぬ此事圃に聞えて家司上田三村又若

年より御身ちかく召つかへし馬場長右衛門河上

一郎右衛門など夜を日につきて参り御ありさまを

見察りてかく天か下の又なき御業の致く

にてもおこたらせ給ハねはいかにとあやしミ神に

御に折りをかけ今一度たいらかにと跡や枕に

よりみて御心ハ何とか物し給ふそと申せば心の

中聊かハる事なし此いためる所たにいへたらなと

常の御氣しきにのたまへはたのもしくをだし

くてきさらきも半過つるに十八日の月すみ

のほる比此者ともを召てもし此病ひに命を

はらは國にまします勝貞公によくつかへをなす

へきよしこまやかにいひきかせ打しほれ給へは皆

思ひの外にて涙にむせひさらに物をたに申あ

えずされは外さまに聞ける人、ハ今や抱入

せ給ふとなきどよめる聲に物も聞えず十九日

廿日ハ御心よけに見え給ひながら露計物参ること

なければいと、心も安からず夜に入て彼家司

二人目賀田渡辺などを近く召出し日とひいひ

渡せし事かまへて遠ふへからす今ハ蓬萊嶋

に粟を求むともいきとまるへしとも思ハれず

胸くるしく目もくるめけはこよひハえずぐすまし

とて近き遠き御ゆかりの人、をあつめひとり

くくく御詞をかはし今ハ物いふか苦しければはや

歸らせ給へと手かき聞えて夜のあけ過る程に絶

入給へりうちくかく有へしと思へる人も何心

なき童も聲をおしますあしすりをし立つ

居つとやのたまひしかくやおはせし物をと

いひかなしむ聲も始終さたかならず既其日も暮

ゆけは御遺言に任せ榮教寺に送り奉りはか

なき煙になし参らすも唯夢とのミたとられ

是をと物おほえたるハ獨もあらざりけらし

馬場長右衛門河上一郎右衛門ハ御心よせをろそかならずかり

そめの御旅ねにもさらに御ゆるされあらざりしか

此度ハ何とかおほしめされけん園にとまり野

山の遊びわさにかつ心をものはへよと残しおき

給へるもかく有へきゆへにやとかへりてうらめし

くこそ思ハれしかハあれと十日あまりの程此世の

かはらぬ御姿を見参らせ永く御供にまからんは

うれしくとて時をもたかへす出たゝれける氣し

き見るに涙もとゝまらず長右衛門ハ國もとにまた

いとけなき男子のあるを忘れずやありけん

一筆残しをかれたる中に

ちりゆくは名にある花と見えすとも

残ることのミにあらはれやせん

要に三宅半介といふあり常に文を好ミ筆の道

をえたれはよく御心にかなひて御膝もとに

つかへ夜るも御枕ちかくふさせかれか心を見給ふに

武藝を学ふも習道をつふやくも他にこえたり

さてこそ身に過たる所領をもたひて猶うしろ

やすくおほされけるかゝる御恩を此度報せんと

思ひ定め今ハのきさみ哥をよみて友達に見せける

其はし書き以追死之志報君恩齡卅四歳

あきらけき光を先にたて、ゆけは

六の道にハたとらしと思ふ

散やすき花さへいまたさもなきに

うき世の夢をやふる春風

と書付たる筆のいきほひ常よりも猶花やか也
此人、をも同じけふりとなすに見る人感涙と
いひ愁歎といひ玉しひをうしなふはかり也

送り捨奉りておほくの人、

歸るを見て

立函

むさし野、草にハあらぬ人の身を

けふなやきそといはぬ悲しさ

供せし人、の煙を見て

たのもしき契りなからもかなしきは

ふた世の道の跡ををふ人

廿三日御骨をひろふとて

ひろひとり手にハむなしき涙にて

あるにもあらぬ玉のおもかけ

御骨八國におさめ奉らん

とて信濃路を具して

のほる我ハ東海道にたち

別れてのほるもいまさらの

やうにおほえて

うかりけるいまはのきハにをとらめや

旅にわかる、袖のなみたは

我年久しく俳諧にかしらをかたふけ眉をしかむれ

といかにととふ人もなく唯身ひとつのことくさ

となし、に心ならず勝俊公聞し召つけて

めし出されいにしへ今のかはりめをしらしめし

旅の道などにてハ野にも山にも御わらひ草の種

をまきて(し)としころ御前ちかく参りなれしを

世にすける人も聞付てしたしめる友かすそひゆけは

我のミ時にあひたるこゝちもせられしに長き別

れのうきめを見奉る事前世の宿縁浅くこそ

思ひしられいと、花の身のよりはり果たる旅の道

すから句なども思ひすて、自我偶三十巻題目

千返日毎に誦して御名を唱侍るかけふは一

七日なりと思ふ日何をか御佛に備奉らんと

すれと旅の空ゆく心はかりにて

桜こそ世々の彼岸の手向草

國に歸りて事のさまいかにと

人のとハんに長物踏せんも

涙におほられ胸もつゝく

ましざりとて語残さんも

ほゐなかるへしと思ふく

すゝろに書付けるならし

御位牌に二月廿一日と

書付給へるを見て

二月のわかれや昔物語

きのふの花ハけふの佛前

天にあふきおしむもつるの春

御骨をかこみて國もとに

まかる船の中にて

ちらすのミか送りもちゆく花の風

永き日数もつもる愁傷

南無くんと唱ふる聲をかすませて

供せし人々の事を思ひて

さりともと思ひきる身や花心

形見にかすむ髪のお髪

のとまざる手跡ハあたと替捨て

守成

立圃

政

暮て

政

守成

立圃

守成

立圃

親元

千時承應四年三月四日於旅宿

書之

立圃

きさらき廿一日勝俊公うせ給ひたるよし同廿八日の夜に入て國に聞えければ男女老若町人も百姓も驚きふためきよもやまことにハあらし

夢にこそかゝるまどひハあれさらすハをひく告来るへしと陸に待浦にたゝすみなかめ暮す

所に十二日の朝御骨をのせ奉りたる船今こそと申せば我さきにと出むかひ堀江の右左にかしこまりあるさて御舟近くなれば近習の人、舷に出て目とめハ見合せながら洞もなくて打かたふく漸有て御骨をかきあげ奉るに

誰か前後をわきまふへきそれより妙正寺の佛殿にかきすへ(たるに)奉り御供の人々の骨をよならへ置たるに堂の内ゆすりみちてかゝやくたる灯もかきくるゝはかり也たけきものゝふハ心乱れすといへと折により事にしたかふにや今ハ誰有て人心ちなるハあらすとそみえし

田中十郎右衛門ハ主君の御心をうこかし同じ床の上に起ふして心のおくを語りあひ参らせし人なるか年月煩ひに籠めて此世の御供

にハもれつれとも来世の供にいかでてるへき君もさおほし召て我をはまたせ給ハんはやまかり出待らんと人よりさきにいそかれける有さま君もさこそうれしくおほしめされけめと涙ながら打さゝめけり

上田七兵衛といひしハ君いまた若くおはせしとき人しれす御文などかよハされ浅からざる中なりしを後にハおほくの人々も見きくにつけて二世までの契リハ違ふましと思ひし事を年月隔りぬれと忘れす今一度ま

見え奉らハといそけとはやなき人とならせ給へる事を道にてきけハ今ハはるく下りてもせんしとて道より引かへし御骨のつかせ給へるを相待て佛前にむかひ南無法蓮華經ととなへをくれたる氣しきもあらすとそ

横山惣右衛門西山半左衛門これらハ一度あやうき命の御恩をかうふりし人なれば事のあらんにハ御馬の先にたち参らせんと思ひたりしかと世帯

にして今までなからへ御供にもれさるこそ
歎きの中よろこひなりといさみあへり

辞世 西山半左衛門

さく時八世の數にたにあらねとも

ちるにをくれぬ西山の花

夫主君に一命を奉るハ戰場に出て捨難き

命をすてゝ忽に軍の利を得さしめ或ハ

むかふ敵と手なミを争ひ或ハ味方どうし

励ミ討死を急て主君に損をとらせ又我

名を世にあげんとて軍の是非をわきまへす

死するもあり又不達者又老武者などの身叶ひ

かたくて人馬にさへられ人しれすむなし

なるも多かるへし是皆一命を奉るといふ

にや此度主君の御跡をしたひてさかりの身

を奉る人、ハ義により恩にしたかふ世の

ならひを思へるなるへしかゝるためし多しと

いへともをのか本性をたかへす露もわるひれたる

氣しきをましへさるハいかはかりかハと目を

おとろかす有さま也世に獨生れてひとり

閑する道ハ大人小人にかはらねと勝俊公常

に情ふかき御心を顕しかくのことくのよき

郎等をあまた召つれ水野美作守前四品勝俊とよハれ

給ひし隠なき御名をは此世に残し信解院

理圓日證大居士と改めしかも後五百歳中廣宣

流布の大曼荼羅を御身にまとひおはし

ませは佛菩薩も哀愍をたれ上品蓮華に

むかひ給ハんとたのもしくおもひやられ見聞人

よろこはさるハあらさるへし

ふたつなく亦みつもなき一巻ハ

見ん人毎の題目の種

南無妙法蓮華經

立圃

日祐花押